



—東地中海地域ニュース—

レバノン：シリア・イラン・ヒズボラ三者会談の意義

(3月5日付仏語週刊誌レブド・マガジン)

3月5日付レブド・マガジン誌は、「平和でなく、戦争でもなく」と題したハリーファ記者の署名入り論説記事を掲載した。概要は下記の通り。

1. 2月25日、ダマスカスにてバッシュール・シリア大統領、アフマディネジャード・イラン大統領およびナスラッター・ヒズボラ書記長が行った三者会談は、中東および西側諸国の首都において広く報道された。これはイスラエルとの紛争における「歴史的かつ戦略的な」転換点を示すための単なるメディア向けのものであったのか、あるいは紛争の新しいルールを規定するためのものであったのか。
2. (イスラエルとイラン・シリア・ヒズボラとの間における好戦的な発言のエスカレーションに言及した後) 交換されたこれらの脅迫はダマスカスにおける三者会談が、一種の「戦時内閣」のようなものである印象を与える。しかし、よく分析すれば、いずれの当事者も紛争を始めたいと考えていないことが分かる。もし、紛争が発生すれば、それは地域全体を巻き込む戦争に発展する可能性がある。これが、三者がイスラエルおよび米国に対して発信しようとした主要なメッセージである。
3. アフマディネジャード・イラン大統領は、「シオニスト集団に対し、地域の国家を侵略して過去の過ちを繰り返さぬよう警告する。今回は、イラン・シリア・レバノンおよびイラクをはじめ全ての者が侵略者に立ち向かうであろう」と述べたが、これが三者により導入された新しいパラメーターである。これらの国の一つに対して攻撃が行われる際には、反撃は集団的なものとなるであろう。従って、将来の全ての紛争は、全戦線での戦争へと変化する恐れがある。
4. しかし、このことは戦争が差し迫っており、不可避であることを意味しない。反対に、全面的戦争となるという脅迫により、ダマスカス・テヘランおよびヒズボラは、イスラエルが2006年にレバノンに対し、また2008年末にガザに対して行ったように、これら同盟者の一つに対して個別の攻撃を行うことを抑止している。イスラエル国会の元アラブ人議員で現在カタールに亡命しているビシャーラは、「彼らは全面的戦争が起こることを脅迫することで、戦争を避けようとしている」と述べている。